様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １２ 日現在

機関番号：２２６０４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ００００４

研究課題名（和文）ヘレニズム辺境のギリシア思想の東漸とインド思想からの還流、相互応酬の統合的復元

研究課題名（英文）Integrative Restoration of the Eastward Expansion of Greek Thought on the Hellenistic Frontier and its Return from Indian Thought and Mutual Repartee

研究代表者
金澤　修（Kanazawa, Osamu）

東京都立大学・人文科学研究科・客員研究員

研究者番号：６０５２４２９６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本科研の研究成果は以下の通りである。ヘレニズム時代のギリシア哲学は、アレクサンドロスの東征以降、東方へと伝播したというのみならず、さらにギリシア文化にとって異文化であるインド思想の把握、あるいは仏教思想の伝達に一定の役割を果たしていた。このことを「アショーカ王碑文・ギリシア語・アラム語バイリンガル碑文」、および「アショーカ王碑文・カンダハル出土ギリシア語碑文」の読解によって提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
仏教思想を伝えるために中期インド・アーリヤ語で刻まれたアショーカ王碑文のギリシア語・アラム語バイリンガル碑文の中に、アリストテレス『ニコマコス倫理学』で主題化された「アクラシア」という概念が認められたこと、そしてギリシア人植民都市「アイ・ハヌム遺跡」をギリシア哲学のインドへの流入経路の一つとして推定したこと、古代ヘレニズム世界の東端でありインド文化の西端であるバクトリア地域において哲学的、思想的交流が翻訳を通じて実現していたことを、具体的証拠を用いて描いた点が本研究の学術的意義である。

研究成果の概要（英文）：Our research project achieves the following results.
We showed that Greek philosophy during the Hellenistic period not only spread to the east after Alexander's Eastern Expedition, but also played a certain role in depicting Indian thought, which was foreign to Greek culture, and in transmitting Buddhist thought. This was demonstrated through our readings of King Ashoka's inscription, bilingual Greek-Aramaic version, and another Greek version excavated from Kandahar.

研究分野：ヘレニズム・ローマ期のギリシア哲学のインド東方地域への流入

キーワード：比較思想　プラトン　アリストテレス　アショーカ王碑文　アイ・ハヌム　バクトリア　仏教　インド思想

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

本研究においては、ヘレニズム・ローマ期におけるギリシア辺境、とりわけバクトリア周辺およびインド文化圏などマウリヤ王朝でのギリシアと非ギリシアの多文化共生の実態を考察したが、研究開始当初、先行研究はそれぞれ存在していたものの、以下の二点が我が国の研究には欠落していたと言えるだろう。1) ギリシア辺境、とりわけバクトリア周辺でのギリシア人の活動とマウリヤ王朝でのギリシア人の活動とを「思想」という領域で横断的に考察する研究が存在しなかった。2)マウリヤ王朝でのギリシア人の活動を象徴するギリシア語版「アショーカ王碑文」に対する西洋哲学からのアプローチが、とりわけ我が国では存在していなかった。

２．研究の目的

「研究開始当初の背景」にも述べたように、本研究は、ヘレニズム・ローマ期におけるギリシア辺境とマウリヤ王朝でのギリシア人の活動を思想という領域に焦点を当てて考察することを目的としていた。これはとりわけ「アショーカ王碑文」ギリシア語版の読解を通して行われた。仏教思想の翻訳がどのように行われたのか、あるいは二つ存在する当該碑文における翻訳者の知的背景に異なりはあるのか、さらには公用アラム語との内容的異なりは存在するのか等を明らかにすることである。この作業によって断片的であったギリシア思想とインド思想、とりわけ仏教思想といった倫理学・宗教領域について、さらには公用アラム語によって刻まれたイラン文化の現地の実態にも触れることを目的としていた。さらにまたそれらのギリシア思想がどのような経路でインド文化圏に流入したのか、当該地域のギリシア人植民都市「アイ・ハヌム遺跡」と関連させて、ギリシア思想の辺境への拡大についても明らかにすることを目的としていた。

３．研究の方法

本研究では以下の方法によって考察を進めた。
1) ギリシアとインドの思想的接触についての従来の研究の再検討を行う。これを通じて、これまで明らかとなっている事実内容の再確認を行う。これは先行研究の欠落部分の明確化であり、本研究の基礎となるものであった。
2) 仏教思想史の一部となっているギリシア語版「アショーカ王碑文」、同アラム語碑文、ギリシア思想史の一部となっている「アイ・ハヌム遺跡」出土哲学的パピルス断片および「アイ・ハヌム遺跡出土」デルフォイ箴言彫刻碑文などを、原文の言語、すなわちギリシア語と公用アラム語、中期インド・アーリヤ語によって直接的な読解を行う。
3) 上記の読解を通して、各碑文のおよび遺跡の内容をギリシア思想の流入経路、およびその拡大という視点から時系列的な視点も含めて再構成する。

４．研究成果

本科研の研究成果は以下の通りである。
1) ヘレニズム時代のギリシア哲学は、アレクサンドロスの東征以降、東方へと伝播したというのみならず、さらにギリシア文化にとって異文化であるインド思想の把握、あるいは仏教思想の伝達に一定の役割を果たしていた。このことを、「アショーカ王碑文・ギリシア語・アラム語バイリンガル碑文」、および「アショーカ王碑文・カンダハル出土ギリシア語碑文」を中期インド・アーリヤ語で刻まれている「アショーカ王碑文」と比較読解することによって提示した。

2) 具体的に示せば、上記インド・アーリヤ語碑文中には「殺生を控える」という文言が刻まれている（磨崖法勅第１章）。

ここでどのような生物も殺生して供儀がなされることが無いように（idha na kiṃci jīvaṃ ārabhiptā prajūhitavyaṃ）

これは「バイリンガル碑文」においては、以下のように翻訳されている。

王は生命あるものの（殺生を）控えており（ἀπέχεται βασιλεὺς τῶν ἐμψύχων）

またこれは「カンダハル出土ギリシア語碑文」でも同様である。

彼が生命あるものの殺生を控えるように命じていた...（ἐκέλευεν ἀπέχεσθαι τῶν ἐμψύχων...）

注目すべきなのは、上記の語彙が、ピュタゴラス派において生類の食用禁忌を意味するギリシア語の術語であることである。ピュタゴラス派もまた「輪廻」を主張しており、それゆえに生類の食用禁忌を主張していたことを理解すれば、このような術語による翻訳は、翻訳者たちがピュタゴラス派の思想や語彙を知っており、それによって彼ら自身が理解したインド文化を表現したと言えるだろう。

3）また同じく「バイリンガル碑文」にはアリストテレス『ニコマコス倫理学』第 7 巻での主要なテーマであり、ペリパトス派が論じた「自制能力の欠如（アクラシア）」という術語もまた使われている。

（かつては）それらに無抑制な人々が（いたと）しても、彼らは（現在では狩猟・釣魚など殺生の）無抑制を可能な限り止めた。（εἴ τινες ἀκρατεῖς πέπαυνται τῆς ἀκρασίας κατὰ δύναμιν）

これは上記の「殺生を控える」という語彙の翻訳とは異なり、中期インド・アーリヤ語で刻まれた「アショーカ王碑文」には対応する箇所のない表現であり、言ってみれば「意訳」である。「それが悪だと知りながら行なってしまう」という事態を描写した「アクラシア」という主張は、アリストテレス以来、ギリシア哲学の中では一定の議論の場を提供するものである。しかしながら、インド思想全般を見るならば、そのような議論により倫理的状況を把握することはなかったと言えるだろう。つまり現実の当時のインド思想はあくまでも主知主義的枠組みによって把握されるものである。だとすると、この翻訳は「バイリンガル碑文」のギリシア語翻訳者たちが、自らのギリシア哲学の知見をもとに独自の翻訳を行ったことの事例であったことを示している。

4）ここで注目すべきは、「カンダハル出土ギリシア語碑文」は「バイリンガル碑文」とは異なって、中期インド・アーリヤ語に忠実であり、「意訳」を行なっていない点である。これは例えば以下の箇所に顕著である（「カンダハル出土ギリシア語碑文」1-2 行）

言論の抑制をなせる人は誰であれ皆、最も抑制ある人間である。決して自分たち（自派）を賞賛しないように、何に関しても他派を非難しないように。

これに対応する中期インド・アーリヤ語碑文は以下の通りである（磨崖法勅第 12 章）。

その根本（宗派の本質の増大）とはこれ、すなわち言動の抑制である。つまり不適切な機会に自派の賞賛と他派の非難が起ることのないように

「言論の抑制をなせる人 γλώσης ἐγκρατὴς」には、プラークリット語「言動の抑制 vaciguttī」が対応する。これは「言語」を意味する vaca と「守る、保護する」√gup-に由来する guttī からなる複合語である。つまり「第二碑文」のギリシア語翻訳は、語彙レベルで中期インド・アーリヤ語碑文を再現しているのである。

5）上記のように「バイリンガル碑文」と「カンダハル出土ギリシア語碑文」を中期インド・アーリヤ語碑文と比較してわかることは、どちらもピュタゴラス派の術語を用いている点は共通するが、アリストテレス・ペリパトス派の使用においては異なっていることという点である。ここから言えることは翻訳態度を違える二つのギリシア語翻訳の伝統が、バクトリア・ガンダーラ地方に存在したことである。

6）さらに「バイリンガル碑文」を見る限り、見られるアショーカ王のエピテットの音写はギリシア語「Πιοδασσης・ピオダッセース」と公用アラム語「PRYDRŠ」と違いがある。形態からすればどちらも中期インド・アーリヤ語からの音写であるのは明らかであるが、ギリシア語では、古典サンスクリット prya-darśi のような r 音が前後とも認められないのに対し、公用アラム語では、piya-daṣi や piya-dasī などがその音写の元の語彙だと想定される。この公用アラム語の音写は、「バイリンガル碑文」が発見された地域であるガンダーラ地方の音韻を反映しているのに対し、ギリシア語は東北インドの音韻を反映していることを明らかにした。この違いの原因については引き続き研究をおこなっているが、おそらくマウリヤ王朝の王都との繋がりを示すものではないかという点を研究代表者は指摘した。

7）上記の研究を補強する目的で、当該地域へのギリシア哲学・倫理学の流入経路が検討された。その証拠の一つは、近隣の「アイ・ハヌム遺跡」に残された「クレアルコス」なる人物に求められる。先行研究を読解する限り、この人物は、ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』第 3 巻 2 節で、キュプロスの都市ソロイの出身で『プラトンへの頌詞』を著していたと報告され、また同じく第 1 巻 9 節でインドの「裸の賢人」の起源がペルシアの「マゴイ」であると言及して

いた、アリストテレスの弟子である「ソロイのクレアルコス」であることを示した。その結果、このペリパトス派の哲学者がギリシア「アクラシア」概念をはじめとした倫理思想の当該地域への流入経路の一つである可能性を示すことができた。

8）以上の考察によって、西洋思想と東洋思想という近現代の枠組みにとらわれて思想史を区分することは古代思想を研究する限り意味のないことであることも示されたと言えるだろう。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 金澤修	４．巻 112
２．論文標題 アプレイウス「擬アリストテレス『宇宙について』」ラテン語訳の意義と影響	５．発行年 2023年
３．雑誌名 専修大学人文論集	６．最初と最後の頁 17-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 金澤修	４．巻 62
２．論文標題 「我々」とは誰のことか？－Enn.，III-8(30)『自然、観照、一者について』第九章の位置づけを巡って－	５．発行年 2023年
３．雑誌名 哲学誌	６．最初と最後の頁 81-109
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 金澤修	４．巻 110
２．論文標題 古代懐疑主義の起源をめぐってー比較思想史的観点からの考察ー	５．発行年 2022年
３．雑誌名 専修人文論集	６．最初と最後の頁 183-211
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 金澤修	４．巻 114
２．論文標題 神意の顕示としての生―カルウェヌス・タウルスのプラトン解釈をめぐって―	５．発行年 2024年
３．雑誌名 専修人文論集	６．最初と最後の頁 185-215
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 金澤修	4．巻 XX
2．論文標題 ギリシア哲学史のマージナル　―インド思想との接触事例の考察―	5．発行年 2024年
3．雑誌名 ギリシャ哲学セミナー論集	6．最初と最後の頁 31-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 宮崎文典	4．巻 73(1)
2．論文標題 現れとしての知恵と共同探求としての対話―『ヒッピアス（大）』におけるヒッピアスとソクラテス	5．発行年 2024年
3．雑誌名 埼玉大学紀要　教育学部	6．最初と最後の頁 207-220
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 金澤修
2．発表標題 第二回プロティノス・セミナー 第52論考『悪とは何か』第3章および第4章12行　翻訳、注釈、内容検討およびディスカッション担当
3．学会等名 プロティノス・セミナー
4．発表年 2023年

1．発表者名 金澤修
2．発表標題 第30論考「自然・観想・一者について」（III，8）第九章
3．学会等名 プロティノス・セミナー
4．発表年 2022年

１．発表者名 金澤修
２．発表標題 ギリシア哲学史のマージナル　インド思想との接触事例の考察
３．学会等名 ギリシャ哲学セミナー
４．発表年 2023年

１．発表者名 金澤修
２．発表標題 石仏以前の石造物　―アショーカ王碑文ギリシア語バージョン建立由来
３．学会等名 日本石仏協会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計2件

１．著者名 酒井潔ほか	４．発行年 2022年
２．出版社 工作舎	５．総ページ数 456
３．書名 モナドから現存在へ	

１．著者名 クリストファー・シールズ（著）、文景楠・松浦和也・宮崎文典・三浦太一・川本愛（共訳）	４．発行年 2022年
２．出版社 勁草書房	５．総ページ数 400
３．書名 古代哲学入門：分析的アプローチから	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	小島　和男 (Kojima Kazuo) (80383545)	学習院大学・文学部・教授 (32606)	
研究分担者	宮崎　文典 (Miyazaki Fuminori) (50506144)	埼玉大学・教育学部・准教授 (12401)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関